近畿中学校駅伝

（11/28･29 奈良県橿原運動公園周回コース）RESULTS

近畿２府４県の各予選会で５位までのチーム、合計３０チームが出場

＜男子＞下段は区間記録と区間順位、上段は通過記録と通過順位　出場３６チーム

	１区（3.2㎞）	２区（3.1㎞）	３区（3.1㎞）	４区（3.1㎞）	５区（3.1㎞）	６区（3.1㎞）	計１８.７㎞
東　雲	島口	松本	白石	奥村	川本	荒木	１時間００分２８秒
	９:５７[14]	１９:４８[13]	２９:４６[11]	３９:５５[10]	５０:２２[10]	６０:２８[10]	[１０位]
		９:５１[14]	９：５８[6]	１０:０９[10]	１０:２７[16]	１０：０６[9]	

＜総合順位＞

１位　陵　南（兵庫）５８分３７秒　２位　平　野（兵庫）５９分２２秒　３位　桂（京都）５９分２８秒
４位　樫　原（京都）５９分５０秒　５位　東　輝（京都）５９分５０秒　６位　南　郷（滋賀）１時間００分１８秒
７位　桜　坂（大阪）１時間００分１４秒　８位　岡　﨑（京都）１時間００分１８秒
９位　飾磨西（兵庫）１時間００分２７秒　**１０位　東　雲（大阪）１時間００分２８秒**

東雲男子上位入賞を果たせず、無念の１０位！

○ 第６４回近畿中学校総合体育大会駅伝競走。今年は奈良県橿原市総合運動公園周回コースで実施された。ややアップダウンのあるコースで、カーブが多く路面もアスファルトの他に石畳や砂利混じりの舗装道路があり、実際の距離表示よりも多少タフに感じるコースである。１区だけコースのレイアウトが変わっていて３２４７m。２区から６区までは３１３５mである。コースの2km付近、およそ６００mは一般道路を交通規制しておこなわれるので、大阪では体験できない駅伝コースとなる。東雲の今大会の目標は上位入賞。大阪中学校駅伝では全員がベストの状態で戦えなかった雪辱を果たし、他府県の全国中学校駅伝出場チームよりもひとつでも多く先着したいという決意である。４日前の２０００mのポイント練習のタイムを見ても、大阪中学校駅伝前よりも確実に選手の状態がいいことがわかっていた。去年の近畿駅伝のときのように、全員駅伝で納得のいく走りをという気持ちで、当日の大会にのぞんだのである。

○ 当日は快晴。風もなく、最近の中ではまだ暖かく感じられる絶好の駅伝日和となった。男子のスタートは１１時４５分。前日の監督会議の前におこなわれたスタート抽選で、島口は前列一番アウトのスタート位置となっていた。ウォーミングアップゾーンで、島口が入念にジョッグや流しを繰り返す動きに注目していた。上位入賞の目標を達成するためには、この１区の流れが大事になる。島口はそのことを十分に理解しているはずだ。やがて役員に促されて、色とりどりのユニフォーム、ハチマキ、たすきをつけた３０人の花の１区の選手が縦２列に並ぶ。スタート付近の沿道にはたくさんの観衆がいたので、１００mほど走ったところの小高い丘の上に登ってスタートの号砲を聞いた。あっと言う間に目の前を３０人のランナーが通り過ぎて行く。東雲が集団の前方に位置している。１区はこのあと野球場のまわりをほぼ１周して１km。１．２km付近でもう一度、この小高い丘の前を通過することになる。先頭集団は縦に長くなりだしたが、島口はその集団の中にいる。歓声が遠くになった。選手はやがて左折。近鉄南大阪線に沿うように２００m近く走ったあと、もう一度左折。今度は公園内の東側に沿って北上する。小高い丘の上に立つと、そのあたりのコースを遠目に見ることができる。４人ほどの選手が飛び出したことがわかった。小さな点をひとりずつ数えていく。その選手の向こうには大和三山のひとつ畝傍山が見える。選手たちの進行方向に向かって、色とりどりの各校ののぼりも移動していく。１５位前後にいる島口の走りを確認することができた。小高い丘の上を降りて１区の選手の到着を待った。先導のバイクに引き連れられるようにトップの選手が帰って来た。兵庫県の平野、さらに地元奈良県の香芝東、続いて岡﨑、そして樫原、桂と京都勢が続く。１０位前後からは混戦。島口の姿が見えた。緩やかな下り坂で彼得意のラストスパートを期待した。疲れでいつものスピードが出なかったかも知れないが、何人かの選手を僅差で捉えて２区の松本にたすきリレー。９分５７秒で１４位。大阪で負けた桜坂（修徳学院）の１区の選手とは３秒差、トップの選手との差は１９秒、およそ１００mの差であった。

○ 何とか流れを作った島口のたすきを受け取ると松本は、ピッチの利いた走りで必死で前を追う。ただし、この２区にも力のある選手が揃っているので、思うように前を抜くことができない。丘の上からそのせめぎ合いを見守る。松本の走りは悪くない。緩やかに上りながら蛇行するコースを駆け上り、あっという間に視界から消えてしまった。２区の選手の到着を待つ時間に焦れた。まもなくトップの選手が帰って来た。リレーでも有名な滋賀県の南郷がトップに躍り出る。京都の東輝中学が区間賞の走りで１０人抜きで２位。岡﨑、香芝東、桂と続く。松本の姿を遠くに見ることができた。追いこみすぎて思うように足が前に出ない状態。きっと心肺より足に乳酸が溜まってダメージがあるはずだ。それでも懸命に前に進もうとする。倒れこむように３区の白石にたすきを渡す。松本はひとりを抜いて１３位、９分５１秒で区間１４位という成績であった。

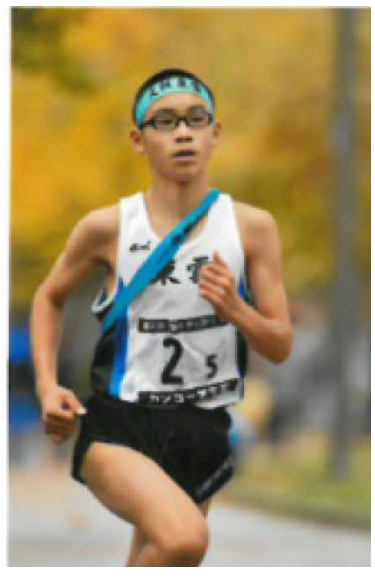
○　３区の白石の走りに期待した。目標達成のためには、この区間で何とか入賞圏内に順位をあげたい。丘の上から彼のダイナミックな走りを見守った。東雲ブルーののぼりも数本見ることができた。男子の補欠のメンバーや当日応援に駆けつけてくれた女子駅伝チームのメンバー、そして保護者の方々がのぼりを手にコースを駆け回ってくださっているのだ。ここでトップが入れ替わって平野、５秒差で香芝東、１秒差で南郷と続く。近畿駅伝らしい迫力あるレース展開となった。白石が桜坂を逆転したという情報が入る。祈るような思いで沿道を見つめた。白石がやって来た。苦しそうに首を左右に振るが、前を見つめている。手を振る４区の奥村。そして、たすきが渡る。白石は２人を抜いてチームを１１位に押し上げる。記録は９分５８秒で区間６位であった。１０位の兵庫の飾磨西とはわずかに１秒差。８位で中継した岡崎とは１７秒差である。桜坂は２秒後にたすきを渡していた。

○　「駅伝は何が起こるか最後までわからない」という言葉がある。今回もその言葉を噛みしめていた。駅伝本番の２日前の晩。東大阪大敬愛高校の日本一祝賀パーティーで上本町のホテルにいた時です。突然、携帯電話が鳴る。思わず、近くのイスにへたりこんでしまった。４区の奥村が３８度の熱を出したという連絡であった。いろいろな状況が頭の中を駆け巡った。もともとは長谷寺の宿舎に１泊することになっていたが、奥村を自宅で療養させることにした。前日の監督会議のオーダー用紙には４区に奥村の名前を書いて提出。当日の朝の委員長会議で手続きを取れば、差し替えができる規定となっている。朝の６時過ぎの電話で奥村の体調を確認しダメであれば、４区には２年生の川城を起用することも、前持って選手全員に伝えることにした。「どんな状況になっても、ベストを尽くせ」選手に伝えた言葉を自分でも何度も心の中で繰り返した。不安要素を決して言い訳にしてはならない。真正面から勝負することの軸を絶対にブラしてはならないのである。

○　「先生、大丈夫そうです」朝一番のお母さんのその言葉に胸をなでおろした。奥村が出場できるのだ。３年生４人がたすきをつなぐ最後の駅伝となる。心情的にこの３年生４人で何とかたすきを繋がせて、いい思いをさせてやりたいと思っていたのである。奥村は去年の大阪中学校駅伝の前日に熱を出したものの、本番は１区で快走したというエピソードを持つ選手でもある。東雲の目標達成のためには、彼をはずせない。最後のピースが何とかはまったことで安堵したのである。実際に車で先に現地に到着していた奥村の表情を見ると、去年と同じで何とかなるはずと確信したのです。

○　たすきをもらってからの奥村の走りが気になって仕方なかった。丘の上から見下ろすと、奥村がぐいぐいと前に出る積極的な走りを見せていた。彼は大阪中学校駅伝４区で殊勲の区間賞の走りをした実力のある選手である。この４区でさらに順位を上げる走りが求められる。８位前後にチームがひしめく。おそらく３．１km の区間の中で抜きつ抜かれつの細かな順位変動があったはずだ。小刻みなアップダウンや急なカーブが選手にボディーブローのようにダメージを与えていたはずだ。最後、野球場をまわるところにも上り坂があり、そこから下ってヘアピンカーブとなって左折。中継所へ向かうことになる。ラスト１５０ｍ地点、奥村がやって来た。体が左右にブレだして最後は失速していた。「脇腹が痛くなった」レース後、彼はそう言っていたが、最後の最後、粘り切れなかったのが響いた。気力だけで５区の川本に何とかたすきを渡した。結局、９位と同タイムながら着差があり、ひとりを抜いて１０位にチームを押し上げたものの、１０分０９秒で区間１０位という成績であった。

○　たすきを受け取った２年生の川本は元気良く走り出す。大阪中学校駅伝ではアンカーであったが、今回は精神的にリラックスさせた状態で走らせたいと考え５区に起用したのである。丘の上から見おろすと、小さな体を目いっぱい使って力走していた。明らかに大阪中学校駅伝のときの走りと違い、彼らしい闘志あふれる走りであった。５区になっても細かな順位変動があったようで、それだけ各チームの力が接近していると考えて間違いない。祈るような思いで川本の到着を待った。トップは陵南、４秒後に平野の兵庫勢。１位と２位の差が詰まって勝負の行方はまだわからない。そのあとは桂、東輝、樫原の京都勢が続く。８位は兵庫の有野北。その２秒後に桜坂。川本がそこから５秒遅れて１０位。顎があがり苦しそうであった。力はほとんど残っていない。それでも６区アンカーの荒木に力強くたすきがつながった。川本は１０分２７秒で区間１６位という成績であった。むずかしい展開の中、必死になってよく頑張って走ってくれた。



○　２年生の荒木は「上位入賞はむずかしくなったが、何としても８位入賞を果たしたい」という強い思いでたすきを肩にかけたはずだ。これまで５人の選手がとにかく１秒でも前へという気持ちでつないだたすき。染みこんだ汗、そして何よりもたすきに賭ける思いが、ひとりだけのロードレース以上に無形の力を選手に与えてくれているはずだ。駅伝は先手必勝がセオリーとなる。自分のリズムで走るためには、良い位置でたすきをもらうことが大切なのだ。逆に前半に思うような順位でなければ、どの選手も前半から突っこんで走ってしまう。そうなると、後半失速がちになる。東雲はその悪循環に陥ってしまっているかも知れない。それでも、前へという熱い気持ちが勝る。その心意気を誰も責めることはできない。数々のドラマで彩られた３０チームの継走がまもなくフィナーレとなる。走り終わった選手もゴール付近に集まって、荒木の到着を祈るような思いで見守った。

○ 兵庫の陵南のアンカーがものすごい勢いでラストの緩やかな石畳を駆け下りてきた。見事なスパートで優勝テープを切り、ゴール付近は歓声に包まれた。１８．７km もの距離を旅したたすきが次々とフィニッシュ地点に向かう。平野、桂、樫原、５位の東輝までが１時間を切る５９分５０秒。１時間を切れば、上位入賞が可能であると目標設定していたが、まさしくそのイメージどおりの結果になった。つまりは１区間１０分計算。この１０分を基準にプラス、マイナスで計算しながらゴールタイムを予測していたのだ。南郷が１時間００分１０秒で６位、桜坂が４秒差の１４秒で７位、さらに４秒差の１８秒で岡﨑。ここまでが入賞。飾磨西のアンカーと荒木がスパート合戦を繰り広げていた。わずかに飾磨西の選手が前に出てフィニッシュ。続いて１秒遅れで荒木もフィニッシュ。１時間００分２８秒で１０位。荒木は１０分０６秒の区間９位の走りであった。

○ それぞれの選手がそれぞれに複雑な思いを持ったはずだ。言葉にしたいこともあっただろうし、感情を直接的に表現したいこともあったかも知れない。ベンチに帰って来ると、選手たちは言葉少なであった。「トライアル行くよ！」の声に、補欠の選手たちがユニフォーム姿に着がえだした。９月に引退して、この日は応援に駆けつけてくれていた３年生の ト部や阪口兄にも「いっしょに走ろう！」と、声をかけている。苦笑混じりの二人の表情が面白かった。交通規制が解除されているために、今回は１km のタイムトライアル。その姿を見てやろうと７００m地点くらいのコースに出た。駅伝を走り終えた選手たちもコースに出てトライアルの選手に声援を送る。何とＴシャツ姿の島口が走っていて、川城と先頭争いを繰り広げている。Ｔシャツ姿があと二人、ト部と阪口兄。一生懸命に走っているのだが、笑顔であった。登録メンバーではなかった１年生の３人も必死で走っていた。

○ ミーティングでレースを振り返った。最後には応援に駆けつけてくださった保護者の方々に、お礼を言うために選手たちが一列に並んだ。１区の島口からひとりずつ自分の言葉で感謝の気持ちを伝えていく。島口と奥村は１週間後に都道府県対抗駅伝最終選考レースが控えているのでまだ走り続けるが、２区の松本と３区の白石は今日が中学生生活最後のレースとなった。「思うような結果を最後に残すことができなかったけど、陸上部に入って良かったです。本当に楽しかったです。皆さんの熱い声援で悔いなく走ることができました。本当にありがとうございました」と、松本が頭を下げる。「僕は６番手の選手で、チームのみんなに迷惑かけたと思うけど･･･」川本の目から大粒の涙が落ちた。それでも前を向いて必死で感謝の言葉を伝える。「夢に向かって頑張ってきたけど、力が足りませんでした････」荒木が泣き出して言葉にならない。沈黙が続く。「来年もガンバレ！」と、保護者から大きな声がかかる。「もっともっと練習して、来年こそはいい結果が出るようにがんばります」と、言葉を締めくくった。同じ２年生の川城も大川も野口も目頭を熱くしながら、決意の表情でうなずいた。１年生の勝山、阪口弟、深野も同じ思いだったはず。過去や今出たばかりの結果はもう変えることができないが、未来はまだまだわからない。たすきは力強く、明日へ、そして未来へとつながっていくに違いない。

○ あっという間の１泊２日の旅が終わってしまった。近畿中学校駅伝という大きな夢舞台に立つことだけで、特別な時間が流れるのだが、見知らぬ町にはのどかな風景がいっぱいでした。ひなびたたたずまいの坊城駅や宿舎近くの長谷寺の駅には、明らかに大阪とは違ったゆるやかな時間が流れていたように感じた。みんなで和気あいあいとお風呂に入ったり、食事をしたり、それでも宿舎ミーティングでは真剣な表情で念入りに打ち合わせをしたり････。明らかに修学旅行とはひと味違った旅となりました。この遠征で中長パートの絆がまた一段と深まったように感じたし、戦いを終えてみんなが大人になったように思えたりもしました。「保護者の車でいっしょに帰っていいよ」と言ったのに、３年生の島口と松本と白石、そしてト部と阪口兄がついてきた。「橿原神宮前の駅でお土産を買いたいです」という松本の言葉に他の４人もうなずく。坊城駅に続く路地を歩いて行くと「（やっぱり）２年生がやって来た！」と嬉しそうな３年生。ベンチコートを着た２年生４人が「僕たちもいっしょに帰りま～す」と駆け寄ってきたのだ。そのときの様子がかわいくて仕方なかった。やがて２両編成の各駅停車に乗る。お土産を買って、橿原神宮前駅からあべの橋行き準急に乗る。２両編成の電車が古市駅で５両編成になりあべの橋駅へ。ここまで来るといつもの人混みだらけの大阪の風景。人の歩くスピードもかなり早くなっている。やがて地下鉄に乗車して阪急電車へ。みんな疲れているのに、いっしょにいる時間がかけがえのないものになっているようだ。阪急茨木市駅改札口を出るときに「今までご指導ありがとうございました」と、松本が頭を下げる。明日からもう松本といっしょに練習することはないのだと思うと淋しさがこみあげてきた。「高校に行っても陸上続けてがんばれよ」と答えたが、本当はもっと立ち止まって話をしてやってもよかったかも知れない･･･。

「旅の終わりはいつも新たな旅の始まりでもある」いつもそう思いながら、瞳輝く選手たちと陸上競技の旅を続けている。